

地域デザインにおける ZTCA モデルの類型

— 四行モデルの提案 —

古賀 広志*

要 旨

本稿では、ZTCA 地域デザインモデルに内在する多様な論理構造を、橋爪大三郎が提唱した「四行モデル」を用いて、類型化を試みる。このとき、ZTCA モデルにおける Z (ゾーン) と T (トポス) ではなく、C (コンステレーション) と A (アクターズ・ネットワーク) の実践過程の類型化という視点に注目した。その結果、(1) 通常の ZTCA モデル、(2) 離合集散モデル、(3) 多重併存モデル、(4) 非定着モデルに類型化した。

キーワード：ZTCA モデル、地域デザイン、四行モデル

On the Typology of the ZTCA Model in Zone Design

— On the proposal for a four-line model —

Hiroshi KOGA

Abstract

This study characterizes the various logical structures in the ZTCA design model employing the “four-line model” proposed by Daizaburo Hashizume. In doing so, we focused on the perspective of typifying the practical processes of Constellation (C) and Actors’ Network (A), rather than Zone (Z) and Topos (T) in the ZTCA model. Thus, we typified them into (1) the ordinary ZTCA model, (2) the discrete-constellation model, (3) the multiple-constellation model, and (4) the nonentrenched model.

Keywords: zone design, ZTCA model, four-line model

*関西大学総合情報学部

1. はじめに

情報システム学徒である筆者は「地域の情報化」というキーワードに関心を抱いていた。そのために、ある先生から「新たに地域を学際的に研究する学会を設立したいので手伝って欲しい」という連絡があった際に、無碍に断ることができなかった。結果的に、いわゆる「幽霊会員」として、全国大会に参加するかは開催場所次第という軽い会員に過ぎなかった。

ところが、偶然とは言え、批判的システム思考の発想と軌を一にするダークツーリズムという概念に触れる機会があり、そこから地域のダークツーリズムという関心が生まれてきた¹⁾。そこから、世界遺産「明治日本の産業革命遺産：製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産である三重津海軍所跡（佐賀県佐賀市）、高島炭坑と端島炭坑（長崎県長崎市）についての事例研究を報告するなど少しずつであるが研究成果を蓄積してきた²⁾。

また、国立ハンセン病療養所の一つ長島愛生園のクルージング事例や東日本大震災から立ち上がってきた地元企業の事例を報告する機会を得て、次第に地域デザイン学会においても積極的に報告するようになってきた。その中で、地域デザイン学会の第11回全国大会の実行委員長を仰せつかることになった。大会の統一論題テーマは「地域デザインモデルの多様な活用」と定められた（その理由は後述する）。

本稿は、同学会における研究委員会報告としての報告「多様な地域デザインモデルの類型とその活用の課題」の予稿原稿を大幅に加筆修正したものである。地域デザインモデルについての議論を当該学会の中に閉じるのではなく、広く議論するための俎上に載せたいという思いから、機関リポジトリという形であるが、公開されている本誌に投稿することとした³⁾。

学会誌であれば、「周知の通り、ZTCA モデルは云々」という短い記述で済むところであるが、文理融合の学部の紀要に投稿することから、情報システム学徒がなぜ地域デザインなのかという前置きを敢えて説明することにした。そして、地域デザインとはいえ、そのためのモデ

1) オペレーションズ・リサーチや情報システム論を学んできた筆者がダークツーリズムに関心を持った経緯、異なる研究領域に通底する共通分母については、以下の文献を参照されたい。古賀広志（2020）「ダークツーリズムを考える（第238回産業セミナー）」『セミナー年報2020（関西大学経済・政治研究所）』pp. 1-13。

2) 三重津海軍所跡については、柳原佐智子・古賀広志（2018）「顧客経験としてのアクチュアリティ形成における情報システムの可能性」『富大経済論集（富山大学）』64(2), pp. 261-289を、高島と端島（軍艦島）については、古賀広志（2022）「ダークツーリズムからみた軍艦島の意義」エキシビションとツーリズム研究班『エキシビションとツーリズムの転回』関西大学経済・政治研究所（研究双書第176冊）所収、pp. 293-336を参照されたい。

3) 地域デザイン学会誌は、J-Stageなどで公開していないので、敢えてWeb上で公開している紀要を投稿先に選んだ。本誌は、年2回発行するうちの1月発行分は、前年度に退職された名誉教授の定年退職記念号になることが多いので、2022年度に退職された北島治名誉教授の記念号を言祝ぐつもりで原稿を準備していた。しかし、北島先生が定年退職記念号としての編集を辞退されたことが分かった。とはいえ、言祝ぐ気持ちは変わらないので、そのまま投稿することとした。

ルの意義や役割を議論するということは、オペレーションズ・リサーチの土俵に近い。そこで、以下では、地域デザインモデルとして提唱された ZTCA モデルの意義について、橋爪大三郎が宗教や文明の根本原理を説明する際に用いた「四行モデル」を用いて類型化し、その課題を論じることにしたい。

2. 問題の所在

議論を始める前に、なぜ「地域デザインモデルの多様な活用」が重要な研究課題なのか、について説明しておきたい。

以下の記述は、「大会に寄せて」と題する実行委員長挨拶をもとに加筆修正を施したものである⁴⁾。地域デザイン学会は2011年に設立され、昨年創立10周年を迎えた極めて歴史の浅い学会である。十年一昔という、一つの区切りを迎えて、学会として新たな十年に向けての歩みを始めるにあたって、改めて「地域デザイン学はどうあるべきか」が議論されるようになってきた。伝統的な地域関連の学会は、地理学や地政学あるいは行政学の視点からの研究が多いように見受けられる。他方、地域デザイン学会は、経済や経営だけでなく、交通や観光さらには農業や地域行政といった背景知識の異なる多様な研究者・実践者の集まりである。言うなれば、学際的議論の場として活発な議論を展開してきたと言える。

他方、議論の場としてだけでなく、独立した学問 (discipline) の地位を獲得するためには、デュルケームが指摘したように「独自の対象と固有の方法論」の確立が不可欠である。多様な研究領域の寄せ集めでは、議論の場としては有益であっても、独立した学問分野になり得ない。議論の場とは、言い換えれば「主題」に他ならない。

それでは、地域デザイン学は、学問なのか、それとも主題なのか。この問いを検討する上で、同様の問いを繰り返し議論し続けてきた情報システム研究の知見が参考になるだろう⁵⁾。

さて、情報システム研究は、その黎明期から自らの立ち位置の設定に苦悶していた。端的に言えば、「学問」か「研究」か、という問いに答えあぐねていたのだ。そこに1人の救世主が現れた。ピーター・キーンである。当時 MIT に所属していた彼は、暗く淀んだ学界の前途に、一筋の光明をもたらした。彼は、情報システム研究は、その研究対象を「組織活動の中で活用される情報システム」とするものの、独自の方法論や構成概念を持ち得ていないと指摘した。つまり、当時は、まだ独自の学問となり得ていないと喝破したのだ。

そして、キーンは、情報システム研究が学問たり得るためには、既存の学問から構成概念を

4) 第11回大会大会実行委員長挨拶「大会に寄せて」以下の URL でも閲覧可能 (2022.9.30. 最終確認)。
<http://www.zone-design.org/conference/202209/greeting.html>

5) このとき「なぜ情報システム研究なのか」と言えば、筆者の専門分野であり、既に情報システム論における学問的アイデンティティ問題についての文献レビュー論文を公刊してるからである。詳しくは、古賀広志 (2014) 「リガーレリバンス論争の系譜：予備的考察」『日本情報経営学会誌』34(4), pp. 31-46を参照のこと。

援用せざるを得ないこと、そして専門誌を発刊し、そこで研究成果を精力的に蓄積していくことが重要であると主張した。彼は、前者の試みを「参照学問」、後者のそれを「累積的伝統」と呼んだ。

さて、地域デザイン学会においても、草創期は、「参照学問の確立」と「累積的伝統の構築」が重要な課題であったと言える。そもそも地域デザイン学会の問題意識は「地域をデザインすること」の背後に見え隠れする論理を明らかにすることにある。そのために、関連諸科学から鍵となる構成概念を援用して「地域をデザインすること」の特徴を切り出してきた（参照学問の獲得）。加えて、学会としては、地域部会、研究フォーラム、全国大会、さらには年2回発刊などを通じて、多くの研究成果が蓄積されてきた（累積的伝統の構築）。その中で、学会独自の着眼点というべき「ZTCA デザインモデル」が生まれてきた（後述）。

かくて、地域デザイン学は、臍気ながらも、その輪郭が浮き彫りになりつつある。言葉を換えれば、黎明期の情報システム研究の課題に着実かつ真摯に取り組んできたと言える。そして、これらの成果を踏まえて、ZTCA モデル（とその修正モデル）を多面的に活用することで、モデルの精緻化や拡張を行う段階に達してきたと考えられる。このような問題意識が「地域デザインモデルの多様な活用」というテーマにつながった。

以上のことから、本稿では、モデルの活用可能性を検討する準備作業として、多様な地域デザインモデルの類型化を試みたい。そして、それぞれモデルの特徴を比較することで、モデル間の補完関係について考察を加えていきたい。

3. 地域デザインモデル再訪

地域デザインモデルを議論する前に、まず「地域デザインとは何か」を確認することから議論を始めたい。本稿では、便宜的に、地域デザインを「地域活性化や地域の問題解決のために、地域の新しい姿を提案すること」と捉えておく。そこで、そもそも「活性化とはいかなる状態か」や「問題とは何か」という議論を整理しておく必要がある。

3.1. 問題解決としての地域デザイン

そもそも、地域をデザインできるのか。地域デザインという言葉が発した際に、少なからず疑問を提示される。われわれの言う「地域」とは、地図上には存在していて、存在しない。このことは「釜ヶ崎」のような「地図にない街」を想像すれば容易に理解できるだろう。日本三大寄せ場と呼ばれた大阪の「釜ヶ崎」は、地図上にその名前を見いだすことはできない。西成区といえば、広すぎる。あいりん（愛隣）地区とよれば、行政から押しつけられた地域である。釜ヶ崎は、かつて存在した字の名である。しかし、現在は、通称に過ぎない。そのために、釜ヶ崎を議論する際に、わざわざ「どこまでが釜ヶ崎なのか」を確認する必要があるほどだ。とはいえ、そこに共住するおっちゃんたちは「釜」と呼ぶ地域に愛着をもっている。この限りでは、

地域とは、そこで生活する人々の心の中に立ち現れてくるイメージに近い。

それゆえ、地域をデザインするとは、地図上に線引きをすることではなく、そこに暮らす人々の心の中（と地理的空間）に何らかのイメージを埋め込み、「他でもない、この地」や「かけがえのない場」という独自性を創出することが地域デザインの鍵になると考えられる。

また、デザインとは「問題を解決する方法を設計する」という意味である（古賀，2019）。ここでは、「外観を美しくする」といった「意匠」ではなく、「設計」という意味でデザインを用いる。このことは、近年とみに注目される「デザイン思考」の考え方と軌を一にする⁶⁾。この点は、スタンフォード大学ディ・スクール（d. school）の草創期（正確には前身の創設時）に作成されたジェイムズ・アダムズの教科書（Adams, 1974）を繙けば、容易に理解できる。そこには、初期のオペレーションズ・リサーチの教科書と重複する課題が少なからず掲載されているからだ⁷⁾。むしろ、同書の前半は、オペレーションズ・リサーチのテキストとしても違和感がない⁸⁾。それは当然のことであろう。デザインスクールの初期のスタッフは、機械工学や設計、オペレーションズ・リサーチの混成チームであったために、問題解決学としてのオペレーションズ・リサーチの影響が少なくない。

以上のことから、地域デザインとは、人々の心の中に立ち現れるべき地域を設計する、立ち現れるべき地域とは「あるべき姿」という意味で「理想像」である。理想を描き、それを実現するために努力するという行為は「問題解決」に他ならない。それゆえ、地域デザインは「地域問題の解決」と言い換えることができる。

そこで、「問題とは何か」についても確認しておきたい。一般に、問題とは「理想（あるべき姿）と現実の間のギャップ」と捉えられている（古賀，2022，60頁）。そして、問題を定義する第一歩は「理想を描くこと」である。理想の背景には、何からの価値観が見え隠れしている。たとえば、「楽しさを継続したい」や「心地よい環境を作りたい」など何らかの価値観が理想を裏打ちしている。次に、理想を実現するために、現状を理解する。現実から理想を外挿

6) スタンフォード大学ディスクールの卒業生であるジャスパー・ウは、「私は『デザイン』とは『問題解決』だと考えています」と述べている（ウ，2019，3頁）。

7) たとえば、『ライトついてますか』のエレベーターのエピソードなど。

8) 筆者は、ジェイムズ・アダムスの書籍を前任校で担当していた「経営意思決定論演習」の補助教材として利用していた。当時は「はしがき」の記述の意味が分からなかったが、デザイン思考問の淵源として読み直すと大変に興味深い。このようなデザインスクールの草創期の教科書（の和訳）が出版されているにもかかわらず、最近の「デザイン思考」を論じる多くの論考において、同書が引用されることはほとんどない。たしかに、アダムスが後に公刊した教科書は「製品開発」に絞ら込んだものでありために、「デザイン思考」そのものの教科書ではないという意見を聞いたことがある。しかし、こちらの書籍は、まさにデザイン思考の要諦が記されている。それにもかかわらず、なぜデザイン思考の論考でアダムスの著作が引用されないのか。その理由は分からないが、個人的には非常に残念である。ただし、デザイン思考がオペレーションズ・リサーチの流れを組んだとすることに否定的な感情を抱くことは理解できない訳ではない（数学を基礎に置くオペレーションズ・リサーチをもとにデザイン思考が生まれたとすれば、数学嫌いには「認めたくない事実」かもしれないという邪推に過ぎないのだけれども）。

するのではなく、最初に理想を掲げることが肝要となる⁹⁾。そして、理想と現実の間にギャップの存在があると判断されたならば、問題を定義することができる。最後に、問題を解決するために、理想を実現するための道筋（打つべき手）を構想することになる。

もちろん、ギャップを埋める正攻法以外にも手はある。たとえば、追求すべき価値を転換する（理想を変える）、あるいは現状を把握するためのデータを見直す（現実把握を変える）ことで問題解決が可能になることもある。それゆえ、ギャップを埋めるための道筋（打つべき手＝戦略）を検討するだけが問題解決でないことが分かる。

3.2. 地域活性化の視点から見た問題類型

次に、地域デザインにおけるもう一つのキーワードである「地域活性化」について考察する前に、ZTCA モデルについて説明しておきたい。

ZTCA とは、地域デザイン要素の頭文字のアロクニムである。それぞれは、ゾーン、トポス、コンステレーション、アクターズ・ネットワークを意味する（原田・古賀，2013，2016）。

第1に、ゾーンは「区切り」であり、地図上から区切りとられた特定の空間を意味する。このとき、ゾーンに類似する言葉と比較すれば、ゾーンの意義が分かりやすい。そもそもゾーンとは、ギリシア語で「腰のベルト」を意味する語（ζώνη）に由来し、ベルトの内側（区切られた内部空間）という意味をもつ。他方、類似概念であるエリアは、ラテン語の「敷地、開放地」を語源として、見渡す限りの土地という意味で境界概念は曖昧と言われる。また、地域に関連する学会が英文名称で用いることの多いリージョンについては、「真っ直ぐにする」を意味する「hreg-」を語源とし、共通の文化を通じて、そこに住む人々の方向性を統一するというニュアンスを帯び、一般に「統治地域」を指すようになった。行政区画を意味するディストリクトの場合は、差し押さえることを意味する「distrain」を語源としている。そこから、税金の徴収対象地域（おそらく「税を差し押さえる」という含意であろう）から領地や行政区画という意味が生まれてきた。以上のことから、ゾーンは「区切りの概念」であり、類似概念とは重点が異なることが分かる。

第2に、トポスとは、もともとは「論争の場」や「記憶術のもとになった空間的配置」を指す言葉である。近年では、伝統的なトポス観から「かけがえのない唯一無二の場」という意味を帯びるようになった。たとえば、著者のサインが記された書籍は「この書籍」であって、他の書籍とは異なる、代替不可能な一品であると捉える場合が、トポスの唯一無二のニュアンス

9) オペレーションズ・リサーチの初期の教科書の多くは「誰にとっての問題なのか」を検討することが重要であると強調している。問題に対峙する意思決定者によって、問題の見え方や理想の姿が異なるからである。他方、経営戦略の論理を問題解決の文脈から整理した伊丹敬之は、現実の延長線上に理想を位置づけるのではなく、まず理想を掲げること（伊丹は、分不相応の理想を掲げることで「不均衡ダイナミズム」を生み、オーバーエクステンションを実現すると主張している）が重要であると強調する（伊丹，1984）。近年、同様の内容が装いを新たに「ムーンショット」や「フィードフォワード」などと呼ばれているようだ。

に近い。また、いきなりトポスを構築することは困難である。歴史的経緯を踏まえた上で、時間をかけて作り込んでいく必要がある。そのために、トポスについては客観的法則というよりも恣意的な経験則が深く関わることになる。言葉を換えれば、トポスのデザインの鍵は、法則定立を目指した自然科学の発想よりも、個別記述を重視した社会科学や人文科学の着眼点にあると言えよう¹⁰⁾。

第3に、コンステレーションとは「解釈枠組みの提供」を焦点とする。本来の意味である「星座」は、星空に輝く点と点を結びつける試みである。そこから、分析心理学を切り開いたカール・ユングは、「単語の連想実験」において、連想に要する時間が比較的長い単語の間の関連性について、星座を紡ぎ出すように検討し、その結果を「コンステレーション」と呼んだのである。重要なことは、意味の連鎖を重要視して、腑に落ちるコンステレーションを構築する点にある。そのようなコンステレーションは、計画を通じて導出されるものではなく、むしろ、実践を通じて回顧的かつ恣意的に紡ぎ出され（立ち現れ：浮かび上がってくる）べきものであろう。また、コンステレーションを通じて、トポスの基本軸が形成される。同時に、コンステレーションは、ゾーンの境界線の修正を要請する場合がある。それゆえ、コンステレーションは、ゾーンを見直し、そこからトポスを創出するための手がかりとなる物語（story）あるいは価値体系を導出する過程と理解できる。

コンステレーションに反応した人々が、その価値観に共鳴し、なんらかの語り（narrative）が生じることがある。このようなクチコミは、現在では SNS を通じて拡散される場合がある。また、コンステレーションの素材は、既存の事物（記念碑や博物館など）、歴史、人物、イベント（瀬戸内芸術祭など）、未来図（環境都市宣言など）など過去から未来に関わる多様な地域資源が中心となるが、場合によれば、アニメの聖地巡礼（茨城県大洗町や宇部新川駅を見に行く人々など）のように外部から付与される場合もある。

また、前述のトポスのデザインは、実践を通じてコンステレーションが提案する価値観を定着化させる過程である。そのために、トポスデザインにおいては「実践」が重要な鍵概念となる点を指摘しておきたい。

最後に、アクターズネットワークである。もともと、われわれは ZTC の三要素を地域デザ

10) 紀要編集委員の事前点検において「トポスを社会科学や人文科学に限定してよいのか」というコメントを得た。大変に有り難いことだ。件の編集委員からは、トポロジー（トポス+ロゴス：日本語では「位相幾何学」と訳されることもある）において、トポスの概念が提唱され広く受け入れられている（実際、トポロジーの考え方がなければ、3D-CAD などを実装できない）。また、圏論は、現代哲学においても重要なキーワードである。それにもかかわらず、本稿執筆時には、この点をまったく失念していた。圏論では「すべての有限極限と冪を持ち、さらに部分対象分類子を持つ圏をトポス」と定義する（ようだ）。とはいえ、付け焼き刃でトポロジーの概念を援用すれば『知の欺瞞』のような批判を免れ得ないだろう。そのために、圏論におけるトポスの議論は、注記するにとどめておきたい。とはいえ、トポロジー最適化などの概念は、地域デザインにおいても大いに示唆に富むものである。それゆえ、ZACT モデルにおける圏論の援用（といってもアナロジーに過ぎないのだが）については、今後の課題としたい。

インモデルとしていた(原田・古賀, 2013)。しかし、そこに関わる人々の自発的かつ即興的行為の重要性を認識したことで、地域デザインの第4要素として、アクターズネットワークを追加した(原田・古賀, 2016)。イメージとしては、「技術の社会的構築」における「関連社会グループ(relevant social group)」や『イノベーターのジレンマ』における「価値ネットワーク」の概念に近い¹¹⁾。しかし、地域の場合、複数のアクターとそのネットワークが関わっているために、むしろ、カロンらによる「アクター・ネットワーク理論(actor-network theory: ANT)」の非・人間的行為主体を弱めた人間中心に捉え直したものに近い¹²⁾。しかし、それでは、本来の人間中心主義を脱却し、モノと人間の対称性を謳うANTの発想を否定するために、換骨奪胎というよりも羊頭狗肉に近い改悪になってしまう。

もちろん、ANT批判の立場から、アクターズネットワークを論じるのであれば問題はないかもしれない。しかし、情報システム論の研究分野において、2000年代頃よりANTは「情報化という実践過程の分析装置」として注目されており、今では、広く人口に膾炙されている¹³⁾。そのために、情報システム学徒の一人として、誤解を招きかねない類語であるアクターズネットワークを用いずに、地域デザインで検討すべき要素をゾーンとトポスをコンステレーションが介在するという意味からZCTに並び替えたモデルを提唱した¹⁴⁾。あるいはゴフマンの表現に倣い「ドラマツルギー」に置き換えようとしたこともある¹⁵⁾。とはいえ、地域デザイン学会において広くZTCAモデルが浸透したことから、本稿では、当該モデルをもとに議論を進めていきたい。

-
- 11) 関連社会グループの概念は、前輪が極端に大きな初期の自転車を受け入れられ、前後輪が同じ大きさの安全性の高い自転車が忌み嫌われた背景を説明する中で提唱されたものである。委細は、ピンチ&バイカー(Pinch & Bijker, 1987)を参照されたい。また、価値ネットワークの概念は、クリステンセン(Christensen, 1997)によって提唱されたもので、たとえば、ハードディスク業界において、8インチディスクを主力とする企業は顧客である大型計算機製造業者の要望に応え、高性能低価格大容量を目指したのに対して、5インチディスクを主力とする企業はパソコン製造業者の小型化の要望に応えたことから、製品に関わる関係者集団が一定の価値観に準拠している点を強調したものである。
 - 12) アクター・ネットワーク理論については、ラトゥールによる入門書(Latour, 2007)や古賀(2021)や教科書である遠山・村田・古賀(2020)を参照されたい。
 - 13) ただし、ANTの受容は欧米の情報システム研究の場合であって、日本ではまだ十分に浸透しているとは言えない。おそらく遠山・村田・古賀(2020)が最初にANTを解説した情報システム論の教科書といえるだろう。
 - 14) 古賀(2017)では、地域デザイン過程は、区切られたゾーンをデザインし、ゾーン内外の事物や文化歴史、出来事、人物などを関連付けるコンステレーションの設定を通じて、ゾーンを見直し、トポスを生み出すということから、ゾーン・コンステレーション・トポスを頂点とする三角形をコロコロと回転させる過程と見なせると考え、ZTC三角モデルを提唱した。
 - 15) 古賀(2021)では、アクターネットワークの過程を解釈主義的に把握する上では、ANTとドラマツルギーという分析装置を主とする必要性があると主張した。このとき、改めて言うまでもなく、ドラマツルギーの概念はゴフマン(Goffman, 1959)が提唱したものである。極めて簡単に言えば、われわれがコミュニケーションを行う際に、その場にふさわしい「役割」を認知し、その「役割」を演じることが重要である(むしろ、役割を演じることでコミュニケーションを成立させている)と考える。中河伸俊(本学部)名誉教授による新訳が発刊予定であることを宣伝しておきたい。

3.3. 地域活性化の視点から見た問題類型

最後に、地域デザインにおけるもう一つのキーワードである「地域活性化」について考察を加えていこう。

ここで、筆者の専門分野である情報システム論が参照学問とする「経営学」の知見を借りることにしよう。経営学では、組織の「活性化」が議論されている。それは、本来の組織の姿を実現することと考えられることが多い。言葉を換えれば、組織は、時間の経過とともに疲弊し、次第にパフォーマンスが落ちてくるという前提から、本来の組織の姿に戻ることが活性化と考えられることが多い。つまり、組織活性化とは、本来の組織の輝きを取り戻す試み（あるいは状態）を指すことになる（蛇足を承知で書けば、本来の輝きを一度も発揮できていないとしても、その状況を打破し、本来の輝きを発揮する場合に「輝きを取り戻す」と表現しても違和感はなからう）。

このとき、組織活性化を「組織のメンバーが、(1) 組織と共有している目的・価値を、(2) 能動的に実現していこうとする状態」とする高橋伸夫の定義は示唆に富む（高橋, 1995, p. 144）。実は、この定義は、近代組織論の鼻祖と呼ばれるバーナード（Barnard, 1938）が主張する「公式組織」の成立要件とほぼ同じである¹⁶⁾。つまり、成立したばかりの組織の瑞々しさを取り戻した状態を組織活性化と理解できる。

他方、地域活性化は「地域おこし」や「地域振興」のニュアンスが色濃い。地域経済や地域固有の文化活動などの活発化、地域にかかわる人々の意欲の向上などを通じて、地域の維持発展を目指す試みと言い換えることができる。つまり、地域活性化という言葉の背後にも「本来の（あるべき）姿を実現する」というニュアンスが含まれていると考えられる。

以上のことから、本稿では、地域活性化を「地域振興に関わる多様な行為主体が共通目的・価値のもとで能動的に協働する状況を目指す試み」と捉えることにしたい。

ところで、問題の構成要素には、意思決定者の他に、意思決定者が選択可能な政策変数と意思決定者が統制できない環境変数、それらに関わる制約条件（たとえば、非負条件や予算上の制約、法的規制など）がある。そして、政策変数と環境変数、さらに制約条件の関係を整理したものをモデルという。なお、前述した ZTCA モデルは、意思決定者が策定可能な政策変数として、Z（ゾーン）、T（トポス）、C（コンステレーション）、A（アクターズネットワーク）

16) 組織という言葉は、一般には、組織図のような「分業体制」あるいは「人間の集まり」というニュアンスが強いかもしれない。入学したばかりの大学生が「ある組織に入りたいと思っている」などと発言すれば、親はギョッとするかもしれない。しかし、これらは組織の静的側面の一部しか把握していない。バーナード（Barnard, 1938）は、組織の特徴をその動的側面つまり活動面に見いだした。そして、彼は、組織を「意識的に調整された人間の活動や諸力のシステム」と定義した。そして、自然発生的に形成される個人的接触を通じて自然発生的に形成される集団ないし結合を「非公式組織」と呼んだ。そこで、非公式組織と区別するために、上述の組織概念を「公式組織」と呼んだのである。公式組織という術語についての説明を伏すべきという紀要編集委員会からの指摘を受けて、注釈することとした。この点について、匿名の編集委員に記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

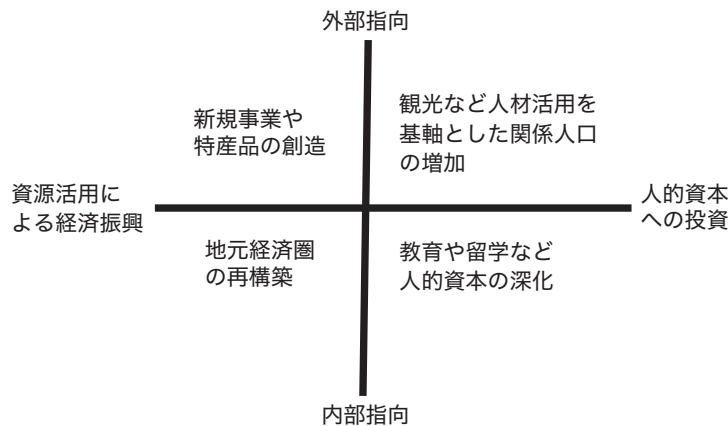


図1 地域活性化の狙いの類型化

を抽出したものと理解できる。

また、政策変数の指向性は次の2つの二分法に大別できる。すなわち、(1) 外部指向と内部指向、(2) 既存資源活用と新規資源創造である。このとき、それぞれの二分法において、「二兎を追う者は一兎をも得ず (stack in the middle)」よりも「両刀遣い (ambidexterity)」が理想的であることは言うまでもない¹⁷⁾。しかし、現実的には、両刀遣いは難しい。そこで、2つの二分法からなる4象限のうち、1つに集中して活性化を目指すことになる(図1)。

すなわち、地域振興には、(1) 地域資源を活用した新規事業や特産品の創造、(2) 地域密着型の地元経済圏の再構築、(3) 観光など人材活用を基軸とした関係人口の増加、(4) 教育や留学などによる人的資本の深化に分けることができる。また、観光や里山留学などの人の交流に注目するアプローチの先には「移住」という選択肢が考えられるが、ここでは、内外の指向性と資源活用と蓄積の2軸から整理することにとどめたい。

これら4つの地域振興の類型ないし範疇に共通するキーワードは、(1) 資源活用、(2) 多様な人の巻き込み、にある。結論を急げば、これら2つのキーワードは、ZTCAモデルのC(コンステレーション)とA(アクターズネットワーク)に深く関わっている。後述するように、現有する(あるいは新規に創造された)資源を関連づけ、それらを活かすための新しい切り口・

17) ポーター (Porter, 1980) は、一般戦略として、コストリーダーシップと差別化は、どちらか一方を選択すべきで、両方を追い求めると中途半端になり結果的に「二兎を追う者は一兎をも得ず」すなわち「途中で身動きが取れない状態 (stack in the middle)」に陥ると指摘した (p. 41)。他方、二兎を追うこと (両刀遣い: 二刀流) は、ダンカン (Duncan, 1976) を嚆矢に、タッシュマン&オリリー (Tushman & O'Reilly, 1996) によって注目された。近年、オリリー&タッシュマン (O'Reilly III & Tushman, 2016) の翻訳が出版されたことで「両利き」という訳語が用いられ、人口に膾炙するようになった。しかし、言語のニュアンスを活かせば「二刀流」の方が良いような気がする (敢えて言えば、野球の米国大リーグでの大谷翔平選手の活躍で「二刀流」という表記は、タッシュマン&オリリー (Tushman & O'Reilly, 1997) の邦訳で採用された「両刀遣い」よりも広く浸透していると思われる)。

物語を創造する過程が「コンステレーション」である。また、多様な人を巻き込み、人と人、組織と組織を連携することで新しい情報的相互作用を生み出す試みが「アクターズ・ネットワーク・デザイン」に相当する。それゆえ、地域デザインでは、ZTCA モデルの4要素のうち、CAが重要となることが分かる。

4. 地域デザインにおける四行モデルの背景

さて、本稿で提唱する四行モデルは、コンステレーションとアクターズ・ネットワークのデザインの前提予見を検討するための手がかりを与えてくれると考えられる。そこで、いよいよ橋爪大三郎が提唱する四行モデルを取り上げることにしよう。彼は、キリスト教やイスラム教の人々の行動様式を僅か四行で表現するモデルを提唱した。本報告では、彼の響みに倣い、地域デザインモデルの本質を四行で表現してみたい。

4.1. 四大文明の四行モデル

議論の前に、橋爪（2019）の四行モデルを簡単に紹介しておく。それは、世界の四大文明の特徴と相違を説明するためのモデルとして提唱されたものである。

たとえば、キリスト教文明の場合、次のような内在論理を持つと橋爪は説明する。

- (1) まず自己主張する
- (2) 相手も自己主張している
- (3) このままだと、紛争になる
- (4) 法律があるので、大丈夫

このモデルの特徴は、比較宗教学の入門書として、キリスト教・ユダヤ教・イスラム教・仏教の相違を一覧できるところにある。自分自身の前提、他者の行動規範とその帰結から「紛争の原因」を明示化した上で、「ユダヤ法があるから大丈夫」や「イスラム法があるから大丈夫」という現実理解の内在論理を明快に占めている。なお、橋爪は、儒教の場合は「順番があるから大丈夫」という論理だと指摘している¹⁸⁾。

18) 儒教が宗教であることは、二条庵先生こと加地伸行の一連の著作が参考になる。たとえば、加地伸行（2015）『儒教とは何か：増補版』中公新書、加地伸行（1994）『沈黙の宗教：儒教』筑摩書房（2011年に、ちくま学芸文庫）を参照されたい。また、マックス・ウェーバーを基礎に宗教とは何かを論じた小室直樹（2000）『日本人のための宗教原論』徳間書店も興味深い（周知の通り、橋爪大三郎は小室ゼミ出身者である）。

4.2. 地域デザインにおける四行モデルの焦点

次に、地域デザインモデルにおける四行モデルを考えてみよう。

ここでの課題は、上述の ZTCA モデルをさらに四行モデルに置き換えることにより、モデルの背後に見え隠れしていた前提与件を浮かび上がらせ、その類型化を試みることにある。

ともすれば、平板な ZTCA モデルの四行モデル化は次のような形式になるだろう。

- (1) まずゾーンをデザインする
- (2) ゾーンに関連する諸資源を組み合わせる物語を構築する（コンステレーション）
- (3) 物語の価値を付与することで「かけがえのない場」であるトポスを生み出す
- (4) ゾーンからトポスを生み出すために参画する人々の活動過程を検討する

このような四行モデルは、ZTCA モデルのテンプレート化であり、事例研究を「穴埋め問題」に落とし込むためのモデルと言える。実際、地域デザインの事例を ZTCA の各要素に分解し、表の形に整理する研究報告が少なからず見受けられる。そのために、ともすれば「モデル適用の意義」を過度に訴求してしまい、事例そのものの独自性を薄めてしまう危険性を孕んでしまう。むしろ、個別事例の面白さ（学術的意義）は、テンプレート化した表に ZTCA の各要素を埋め込むのではなく、地域を変革しようとする人々の熱意を創意と工夫の過程（悪戦苦闘なのか悠々自適なのかは問わない）を誠実に分厚く記述することである。あるいは、その過程での成果を（中間的であれ）評価することにある。そのためには、ZTCA の一覧表のようなテンプレート化を促す単純な四行モデルを超克し、現場の苦闘を丁寧に記述するためのモデルが必要となると思われる。結論を急げば、求めるべきモデルは、橋爪の提示した四行モデルを地域デザイン版に翻刻することで得られると筆者は主張したい。

そこで、新しく提唱される四行モデルは、第一行目に「地域を活性化したい（あるいは何らかの問題を解決したい）」と考える複数の人々の存在を確認することから始まることになる。そして、第二行目以降は、ZTCA モデルにおける C（コンステレーション）と A（アクターズ・ネットワーク）に注目する形で「他者との地域イメージの相違をどのように解消していくのか」という過程に内在する論理のモデル化を試みた。

このとき、敢えて四行モデルに ZTCA モデルの「ゾーン」や「トポス」を取り込まなかった理由は、次の通りである。

まず、筆者のこれまでの調査経験から言えば、地域活性化に取り組む人々は、最初から「この地域を元気づけたい」という形で「ゾーン」や「トポス」についての思いを抱えていることが多い。あるいは行政組織の場合、自らの区域という前提をおいて議論が始まることが多い。しかも、このとき出発点は、区切りとしてのゾーンであると同時に「私たちの土地」というトポスの要素が深く関わっている。そのために、ゾーンからコンステレーションを経由してトポスが創出されるという ZCT 三角モデルや ZTCA モデルの思弁的過程とは別に、ゾーンであり

トポスという意識が存在することも事実であろう。そのために、ゾーンとトポスという区分をせずに「地域をなんとかしたい」という「思い」からスタートするモデルを想定することにした。そこで、四行モデルの第一行目は、地域に対する思いから始めることにしたい。

次に、ZTCA デザインモデルにおいて、ゾーン（地図上の区分）やトポス（この地域という思い）は、いわば「出発駅」と「終着駅」に相当する。その経路において、コンステレーションとアクターズ・ネットワークのデザインを通じて、ゾーンとトポスは、意図せざる結果を包摂（行きつ戻りつ）しながら、即興的に立ち現れてくると考えられる。そのため、デザイン要素としては、(1) ゾーンからトポスを創出する際の羅針盤となるコンステレーション、(2)、多様な参画者を巻き込み運動のうねりを生み出していくアクターズ・ネットワークが重要になるのではあるまいか。そう考えると、ZTCA モデルの鍵は、後半部分の CA に置かれることになる。そこで、四行モデルでは、敢えて CA のデザインに限定してモデル化することにした。言葉を換えれば、コンステレーションとアクターズ・ネットワークの過程に内在する行動規範や論理を表出化する手がかりとして、四行モデルを提唱することとした。

4.3. 地域デザインにおける四行モデルの類型化

それでは、いくつかのモデルを提示してみよう。モデルの類型化を検討する際に、コンステレーションの併存状況に注目することにした。その結果、次のような類型化を試みた。そこでは、(1) 複数のアクター（ズ・ネットワーク）が提唱するコンステレーションに対する「摺り合わせ」の有無、(2) 複数のコンステレーションの存在の様態に注目する（図2）。

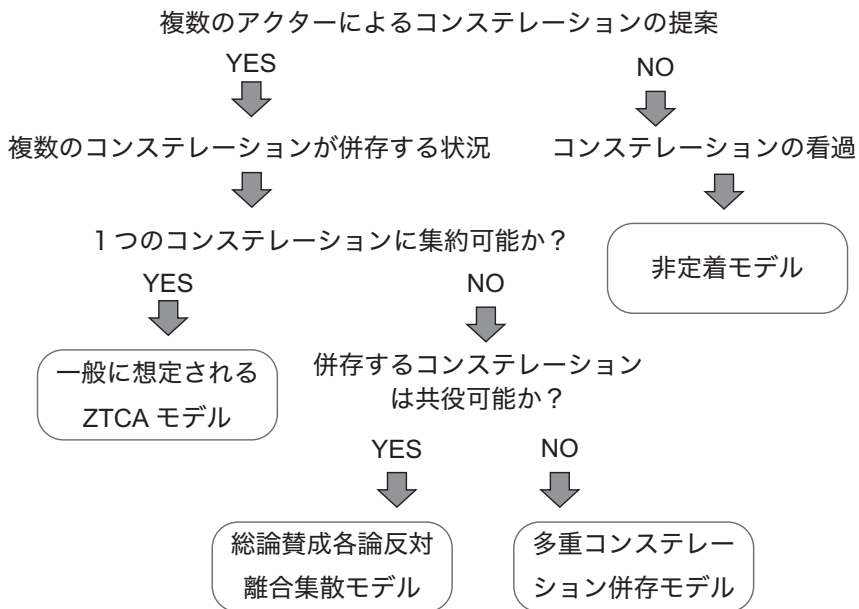


図2 四行モデルの類型化

以下、各モデルの特徴、そこでの研究課題について簡単に説明を加えていきたい。

(1) 一般に想定されている地域デザインモデル

まず一般的に想定されている地域デザインモデルを四行モデルで示したい。

- (1) 地域のあるべき姿をイメージする
- (2) 他の人も地域のあるべき姿をイメージしている
- (3) このままだと、あるべき姿がぶつかり合う
- (4) アクター間の交渉を通じて1つのコンステレーションが立ち現れる

このモデルの前提と件は、地域振興を目指す諸活動を通じて、多様なアクターの描いた地域イメージが摺り合わされることにある。つまり、同モデルでは、地域振興の実践を「多様なアクターへの働きかけや事物の意味解釈、人工物（イベント、事業、特産品などを含む）の創出を通じて、地域イメージの最大公約数的な意味を見いだす過程」と見なしている。

加えて、四行目の実践を通じて立ち現れてきたコンステレーションは、さらなる実践を促進するエンジンとして機能する。同時に、多様なアクターの協働を強固にし、活性化した状態を維持・発展させる原動力となる。以上の過程は、従来の理想的な ZTCA モデルの内在論理を明示化したものである。

異なるアクター間でのコンステレーションの摺り合わせは、後知恵的に解釈すれば、各コンステレーションを通底する共通項目の析出として理解できる。そのために、コンステレーションの鍵になるキーワード（場合によれば、事物やイベントなどの具体的な項目）を定量的に分析することで、コンステレーションのすりあわせの方向性を明示化できる。あるいは、コンステレーションの構成資産をもとに、各資産のイメージを探り、その共通項を導出するための定量的分析も可能であろう。この限りでは、四行モデルの特徴として、次の2点を指摘することができる。すなわち、(1) 検討対象は、あくまでも「アクターの実践に内在する規範や論理」であること、(2) モデルを検討することで、定量的調査や定性的調査の課題を見いだす手がかりを提供することである。

(2) 総論賛成各論反対の多重コンステレーションの集合離散モデル

第2のモデルは、最大公約数的な意味合いのコンステレーションを見いだせたとしても、実際には総論賛成各論反対の立場を採るアクターが複数あり、相互に複雑な利害関係の網に絡みとられている場合がある。そこでは、異なるコンステレーション、異なるアクターズ・ネットワークが併存しつつも、状況に応じて離合集散すると考えられる。このような内在論理を四行モデルで表すと次のようになる。

- (1) 地域のあるべき姿をイメージする
- (2) 他の人も地域のあるべき姿をイメージしている

- (3) このままだと、あるべき姿がぶつかり合う
- (4) 複数のコンステレーションとアクターズ・ネットワークが併存し状況に応じて離合集散する

このようなモデルの具体例として水俣市の環境活動を指摘できる。同市では、行政や市民団体など多様なアクターが「水俣」のイメージを描いて活動をしている。

たとえば、JR 水俣駅には「ようこそ水俣へ」との旗印の下で、地元を紹介する展示スペースがある。水俣出身の作家が紹介されているが、そこには『苦海浄土』などで知られる石牟礼道子の名前はない。また、特産物などの掲示はあっても、「水俣病に苦しむ人々」についての言及はない。駅舎がチッソの水俣工場の目の前に位置するためか、公害に関する記述を遠慮したのかもしれない。

水俣は、現在「環境モデル都市」として多様な環境活動を展開している。あるリーフレットには「水俣病は何十年も前に起きた公害ですが、今を生きるわたしたちに、たくさんの教訓を残してくれました」と記載されている。しかし、公害は終わっていない。壮年期に発病した胎児性水俣病患者も少なくない。現在も病気を抱えておられる患者を支援する団体も少なくない。しかし、団体間の連携が円滑とは言いがたい。とはいえ、各団体は表面的には対立することではなく、イベントの内容に応じて是々非々で参加している。そのような是々非々の態度は、水俣病の被害者の慰霊碑を巡る対立として目に見える形で浮かび上がることになる。

このように複数のアクター群が任意の地域イメージに対して総論賛成・各論反対という是々非々の態度から「離合集散」を繰り返す場合のモデルを「離合集散モデル」と呼ぶことにしたい。ここでは、コンステレーションは複数あり、ときには大きな物語に包摂され、ときには差異を強調することで別行動をとる。結果的に、玉虫色の大きな物語を装うトポスの傘の下で、二重三重のトポスが併存することになる。このような内在論理が「離合集散モデル」の特徴である。

さて、離合集散モデルでは、個別記述により背景や歴史的経緯を繙くことで、各アクター群の行動規範を明らかにすることが期待できる。また、大きな物語の下で集合する実態を特定のイベントでの参加者数や参加の誘因や動因を定量的に調査することができる。このような問いは、ZTCA モデルをテンプレートとして利用するという発想からは生まれてこないだろう。それゆえ、アクター群の行動規範に内在する前提を明示化する四行モデルを検討する意義は少なくないと思われる。

(3) 対立することのない多重コンステレーション併存モデル

第3モデルは、提案された複数のコンステレーションが通底する共通項目を見いだすことなく併存する過程を示す「多重コンステレーション併存モデル」である。具体的には、次の4行でモデル化される。

- (1) 地域のあるべき姿をイメージする
- (2) 他の人も地域のあるべき姿をイメージしている
- (3) このままだと、あるべき姿がぶつかり合う
- (4) みなバラバラのコンステレーションを維持できるので大丈夫

このモデルは、橋爪の「ヒンドゥー文明モデル」の応用である。橋爪によれば、ヒンドゥー文明では、皆がバラバラに暮らしているので、一見すれば、強い自己主張どうしのぶつかり合いが危惧されるのだが、実際には、他者と無関係にクラスがゆえに紛争が起きないという。そこから、バラバラのコンステレーションが提示されても、互いに論争にならずに併存するモデルを策定した¹⁹⁾。

このモデルの特徴は、同じ地域・構成資産を対象としつつも、どこに光を当てるのかは行為主体によって異なる点に注目することである。そのために、複数のアクターズ・ネットワークが微妙に異なるコンステレーションを描く場合がある。野球の例をあげれば、一口に「阪神タイガース・ファン」と言っても、推しの選手が異なるために、ファンとしての一体感よりも対立が強くなる場合がある²⁰⁾。

このモデルでは、ゾーンやトポスにおける共通項目が少なくないにもかかわらず、それらを支えるコンステレーションやアクターズ・ネットワークが複数併存する様相を表すものである。このとき、コンステレーションやアクターズ・ネットワークの間には、明らかに対立構造が存在するにもかかわらず、対立構造を可視化される場面は少ない。むしろ、互いを容認せず無視することで、相互に干渉しあうことなく多重的に併存する点に特徴がある。

たとえば、瀬戸内に浮かぶ豊島は、不法投棄の島と芸術の島という二つのコンステレーションが併存する形で地域デザインが展開されている²¹⁾。もちろん、過去の不法投棄の問題と現在の芸術をつなぎ合わせようとする論者も少なくない。他方で、瀬戸内芸術祭の一環で、新しい島のイメージのみを訴求する論者もいる²²⁾。しかし、過去の暗部を蒸し返すなどといった対立構

19) 紀要編集委員会による投稿原稿の点検作業を通じて、「この併存モデルの三行目は必要なのか、併存することが明らかであれば、三行目は杞憂ではないか」という指摘を受けた。確かに、併存が自明であれば三行目は不要かもしれない。実際の地域デザインの現場で、複数のコンステレーションが提示され、それらの間で何らかの緊張関係が生じるように思えたにもかかわらず、結果的に併存できたという場合があると考えられる。そのようなニュアンスを伝えるために、敢えて三行目までは同じようなモデルを示したのである。

20) 卑俗な例で恐縮だが、「捕手は梅野で固定すべきだ」や「いや坂本でいくべきだ」、「糸原を出すな」や「糸原ほど打てない選手は出さなくて良い」といった「推し」の選手に対して、「アンチ」のコメントがニュースサイトなどで散見される。同じ阪神ファンなのに、かえって辛辣なやりとりがなされている。

21) 不法投棄問題については、住民訴訟の弁護団の一人であった中坊公平の著作（中坊公平、2000、『中坊公平・私の事件簿』集英社新書）や大川真郎（2001）『豊島産業廃棄物不法投棄事件』日本評論社などを参照されたい。

22) 芸術の島というコンテクストを形成する中で、不法投棄問題などの歴史に言及したものとしては、

造は明示的ではない。しかし、離合集散モデルのように、コンステレーションの共通項目を見いだすことも難しい。このような特徴から第3モデルとして「併存モデル」とした。

なお、このモデルは、前述の2つのモデル（一般に想定されている地域デザインモデルや離合集散モデル）が発言する前（あるいは中間）段階のモデルと位置づけることができるかもしれない。たとえば、異なるコンステレーションを接合することに成功すれば、第1モデル（コンステレーションにおけるコンテクスト転換モデル）に発展し得る。また、離合集散モデルとして展開されるかもしれない。そのような発展過程でなく、併存状態が定常化し安定している場合であれば、純粋な併存モデルと言える。この場合、複数のコンステレーションの構成資産の差異に注目することで、クラスター分析や内容分析などの実証的研究などが期待できよう。

(4) 非定着モデル

最後に、科学哲学のストロングプログラムの響みに倣って、コンステレーション形成が頓挫する場合のモデルを検討してみよう。それは、次のようにモデル化できる。

- (1) 地域のあるべき姿をイメージする
- (2) 地域の人々は現在の地域に満足している
- (3) 他の人による提案に関心が持てない（あるいは反対運動が生じる）
- (4) 現在の地域のイメージが維持される

このモデルは、新たな試みが広く受け入れられない場合であるために、失敗事例といえる。改めて言うまでもなく、失敗事例を蓄積する意義は少なくない。とはいえ、失敗事例の報告が公開されることはあまりないように思われる。

5. 地域デザインにおける四行モデルの実践論的意義

以上、一口に「ZTCA デザインモデル」と言っても、そこに内在する論理によって、モデルの実践的意義が異なるという立場から、橋爪大三郎が宗教の内在論理の説明に用いた「四行モデル」を援用して、地域デザインモデルの類型化を試みた。

繰り返しをいとわず強調すれば、従来の地域デザインモデルでは、(1) デザインされた地域を地図上で明示化できる部分をゾーン、(2) 心の中に描かれる「かけがえのない場」というイメージを醸成するトポス、(3) 地域の圏内の人工物や歴史から「物語」を紡ぎ出すコンステレーション、(4) そこに関わる人々の協働体制を整備するアクターズ・ネットワークから構成されている。

佐々木良 (2018) 『美術館ができるまで なぜ今、豊島なのか?』 啓文社がある。島の歴史に触れずに芸術の島というコンステレーションを形成しようとする潮流とは異なる点で興味深い。しかし、過去の影と現在の光を統合するという姿勢とは言いがたい。

このとき、地域デザインの実践に注目すれば、ZTCAの4つの要素が唯一つに絞り込まれることが少ないように思われる。むしろ、現実には、複数のアクターズ・ネットワークが複雑に絡み合う中で、複数のコンステレーションが提案され、それらが摺り合わされるときもあれば、併存する場合もある。四行モデルを提示することで、このような状況を説明するための足掛かりを提供できたのではなかろうか。

もちろん、モデルの意義は現実の単純化にある。それゆえ、四行モデルは必要以上に複雑化しているという批判を受けるかもしれない。とはいえ、ZTCAモデルは、ともすれば成功事例を説明するためのテンプレートのように活用される傾向が強い。むしろ、事例研究のレリバンスを高めるためには、成功事例にせよ失敗事例にせよ、その実践過程の厚い記述を蓄積することが重要であろう。そうであれば、厚い記述を行うための参照枠組みが必要である。本稿で提唱した四行モデルが参照枠組みとして少しでも役に立つことを期待している。

とはいえ、四行モデルは、アクター間のコンステレーションの並立可能性を典型的に説明したに過ぎない。実際には、多様なアクターの間でのやりとりだけでなく、人工物（構造物や法律だけでなく歴史などの非・人間的要素）の解釈や適用の過程であるもある。四行モデルでは、そのようなANTとして扱うべき過程を三行目で簡単に示しただけである。四行目は、ANTにおける「暗箱化」の結果を示しているが、そこに至るまでの「翻訳過程」は、三行目として簡単に示されただけである。これらの点については、モデルとしての簡素化を優先したことを強調しておきたい。

加えて、実際の地域デザインの間では、ゾーンとトポスは相互参照的に検討されることが少なくない。その相互参照の過程において、コンステレーションが検討される。一行目と二行目は、このような検討の過程を示している。

6. おわりに

本稿では、ZTCA 地域デザインモデルの下位要素の中で、コンステレーションとアクターズ・ネットワークの動態を橋爪大三郎が提唱した「四行モデル」を用いて、類型化を試みてきた。とはいえ、本稿では、モデル化と言いつつも、その素描を行ったに過ぎない。今後、モデルを精緻化していくことにしたい。そのためにも大方の批判を仰ぎたい。

謝 辞

本文中で述べたように、本報告は、2022年9月10日に株式会社博展本社にて開催された地域デザイン学会の第11回全国大会での筆者の研究委員会報告「多様な地域デザインモデルの類型とその活用の課題」の予稿原稿（予稿集76-79頁）を大幅に加筆修正したものである。当日、会場担当を務めていただいた福田康典（明治大学）教授、討論者の村山敏夫（新潟大学）准教授をはじめオンライン参加の諸先生には有益な示唆をいただいた。また、本学部紀要編集委員

の匿名の査読者（原稿点検者）には、大変に有益なコメントを頂戴した。この場をお借りして、記して感謝の意を表したい。ありがとうございました。もちろん、起こりうる過誤については、筆者に帰せられるべきものである。

また、本稿は、本学部紀要が「北島治（総合情報学部）教授 退官記念号」として発刊される際に投稿すべく準備していたものである。北島先生には、大学院プロジェクトをはじめ様々な場において大変にお世話になったことから、何らかの形で論考を寄稿するつもりであった。諸事情から本号は退官記念号にはならなかったが、北島治先生の退官を心よりお祝い申し上げます。

なお、本報告、JSPS 科研費21K01650, JP20K01899, 17K03909, 16H03663, 関西大学政治・経済研究所 エキシビジョンとツーリズム研究班の助成を受けた成果の一部である。

参考文献

- Adams, J. L. (1974) *Conceptual Blockbusting: A Guide to Better Ideas*. Basic Book (恩田彰訳『創造的思考の技術』ダイヤモンド社, 1983年; 大前研一訳『メンタル・ブロックバスター』プレジデント社, 1999年, 新版2013年).
- Barnard, C. I. (1938) *The Functions of Executive*, Harvard University Press (山本安次郎ほか訳『経営者の役割』ダイヤモンド社, 1956年).
- Christensen, C. M. (1997) *The innovator's dilemma: when new technologies cause great firms to fail*. Harvard Business Review Press (伊豆原弓訳『イノベーターのジレンマ』翔泳社, 2001年).
- Duncan, R. B. (1976) "The ambidextrous organization: Designing dual structures for innovation," In Killman, R. H., Pondy, L. R. and Slevin, D. [Eds.] *The Management of Organization Design: Strategies and Implementation*, North Holland, pp. 167-188.
- Goffman, E. (1959) *The Presentation of Self in Everyday Life*. University of Edinburgh Social Sciences Research Centre. Doubleday (石黒毅訳『行為と演技：日常生活における自己呈示』誠信書房, 1974年).
- Latour, B. (2007) *Reassembling the social: An introduction to actor-network-theory*. Oxford University Press (伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』法政大学出版, 2019年).
- O'Reilly III, C. A., and Tushman, M. L. (2016) *Lead and Disrupt: How to Solve the Innovator's Dilemma*. Stanford University Press (入山章榮監訳, 渡部典子訳『両利きの経営：「二兎を追う」戦略が未来を切り拓く』東洋経済新報社, 2019年).
- Pinch, T. J. & Bijker, W. E. (1987) "The social construction of facts and artifacts: Or how the sociology of science and the sociology of technology might benefit each other," In Bijker, W. E., Hughes T. P. and Pinch T. J. [eds.] *The Social Construction of Technological Systems*. MIT Press, pp. 17-50.
- Tushman, M. L., and O'Reilly III, C. A. (1996) "Ambidextrous organizations: Managing evolutionary and revolutionary change," *California Management Review*, 38(4), pp. 8-29.
- 古賀広志 (2022) 「多様な地域デザインモデルの類型とその活用の課題」『2022年度一般社団法人地域デザイン学会第11回全国大会予稿集』 pp. 76-79.
- 古賀広志 (2021) 「ZTCA モデルとデザイン・サイエンスの類似性：地域デザイン学の研究課題についての試論」『地域デザイン (地域デザイン学会誌)』第18巻, 131-150頁.
- 古賀広志 (2019) 「改訂版 ZCT モデルにおける3つの論理：ダークツーリズム、エフェクチュエーション、経験経済」『地域デザイン (地域デザイン学会誌)』第13巻, 101-119頁.
- 高橋伸夫 (1995) 『経営の再生』有斐閣.
- 橋爪大三郎 (2019) 『4行でわかる世界の文明』角川新書.

- 原田保・古賀広志（2016）「地域デザイン研究の定義とその理論フレームの骨子」『地域デザイン（地域デザイン学会誌）』第7巻，pp. 9-29.
- 原田保・古賀広志（2013）「『海と島』の地域ブランディングのデザイン理論」原田保・古賀広志・西田小百合編『海と島のブランドデザイン：海洋国家の地域戦略』芙蓉書房出版.
- 中河伸俊（2021）「当惑する生理心理的存在物と印章管理：ゴフマンから始める感情社会学」ゴフマン生誕100周年記念シンポジウム「ゴフマン研究の現代的展開」配付資料.